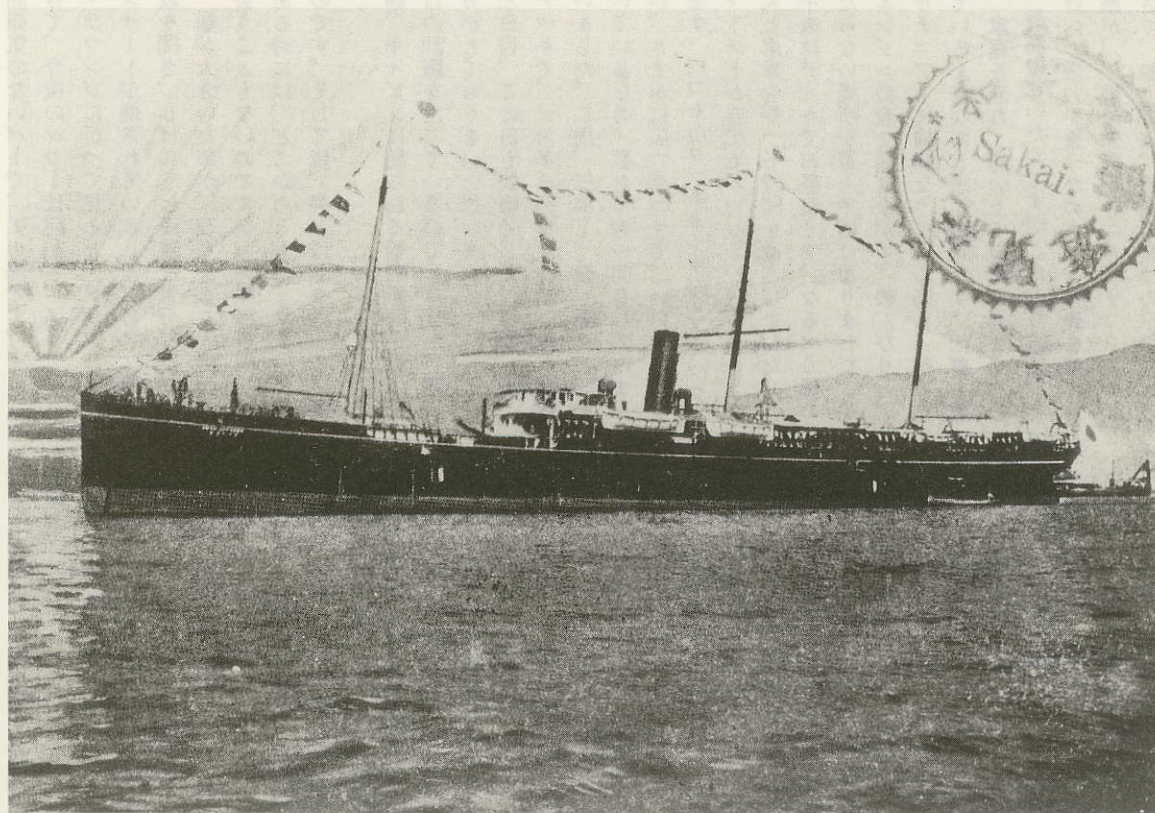


# ろせった丸

《主要目》鉄製貨客船、尾城汽船所属、3,502総トン、  
主機二連成汽機、速力13ノット、1880年英国ハーランド  
& ウルフ造船所建造、前名ロセッタ ROSETTA

## 明治に生まれた日本初のクルーズ船、満韓巡遊船



### 客船の復権

第二次大戦後、ジェット旅客機の目覚ましい台頭により、交通機関としての使命を終えたかにみえた旅客船が、クルーズ客船という新しい装いで再び黄金時代を迎えようとしている。

かつて定期客船の桟舞台であった北大西洋航路では、ドイツの快速巨大船「ブレーメン」がデビューした一九二九年に、年間約百万人の旅客が大西洋を横断した。ところが今や、カリブ海や北米西海岸では、それに数倍する膨大な数のレジャー客がクルーズ客船による船旅を楽しんでいる。

日本でもようやく最近、航洋客船によるクルーズへの関心が高まり、「ふじ丸」「おせあにつく・ぐれいす」といった本格的なクルーズ客船が誕生したことは周知のとおりである。こうした客船の派手な復活を、いったい誰が予想しただろう。

クルーズ客船というのは、ひとことでいえば、観光地を周遊航海するレジャー主体の客船のことだ。この場合、船客が船をホテル代わりに利用する点が大きな特徴であり、目的港に着いたら客がさっさと下船してしまうかつての定期客船とは根本的に性格を異にしている。よくいわれることだが、入港が遅れる



と定期客船では客から文句が出るが、クルーズ客船では逆に喜ばれるのである。

## クルーズの始まり

このように、船を使って観光地を周遊するというアイデアは、古く木造外輪汽船の時代からあった。筆者の知るところでは最初の着想者は、英国の老舗船会社P&O社の創立者の一人であり天性の楽道家だったアーサー・アンダーソンらしい。

一八四四年にP&O社は、彼のアイデアにより、自然景観と古代史跡に恵まれた地中海東部のローカル航路を、寄港地での観光付きのクルーズ航路として精力的に宣伝し、周遊チケットを売り出した。同年、英国の文豪ウィリアム・サッカレイは、P&O社の招待でこの航路を旅し、後に紀行文を発表してクルーズの楽しさを世に紹介している。この地中海クルーズは、クリミア戦争が勃発するまで十年間続けられた。だが、これはいわば、既存の定期サービスの売り方に味を付けただけのものであり、専用の客船による現代的なクルーズとは違う。

今日のような本格的なクルーズ・サービスが誕生したのは、それから三十年ほど後の一八八〇年代にはいつてからのことだ。一八八一年に英国のある個人船主は、P&O客船の

「セイロン」を買い取ってクルーズ客船に改装し、史上初の世界一周クルーズを成功させており、一八八九年には英国のオリエンツ・ラインが、地中海とノルウェーへのクルーズを開始している。次いで一八九一年にはドイツのハンブルク・アメリカ・ラインが、クルーズを主目的に設計された世界最初の客船「オセアナ」をデビューさせた。

## ろせった丸のクルーズ

西欧先進国で本格的なクルーズ・サービスが誕生してわずか数年後、まだ極東の小国だった明治の日本に、現代風のクルーズ客船が出現している。一九〇六（明治三十九）年七月二十五日に横浜を出帆した「満韓巡遊船ろせった丸」がそれである。

当時の日本は、日露戦争直後の精神昂揚期にあったが、このクルーズは日清日露の血戦力闘の戦跡を訪ねようというもので、全航程二十八日、巡遊ルートは次のようであった。

横浜、大阪、呉（海軍工廠）、門司（若松製鉄所）、釜山、仁川（京城）、鎮南浦（平壤）、大連（奉天、遼陽など）、旅順、長崎（三菱造船所）、佐世保（海軍工廠）、神戸（川崎造船所）、横浜。（一）内は見学地。

これを企画し主催したのは朝日新聞社であるが、見学地の選択に新聞社らしさが窺われる。

る。どちらかといえば、レジャー色を薄めた視察クルーズ的な航海である点は、日本で現在、クルーズの主流となっている研修船、青年の船に相通じるものがあつて興味深い。

船賃は十八〜六十円（食費は別料金）。乗船者は三百七十八人で、会社員、教員、商人、公務員、僧侶、学生など、あらゆる階層に及んでいた。お年寄りか自営業者しか楽しめない現今のクルーズと違って、明治人にはゆとりがあつたのだろう。また、航海中のエンタテインナーとして、講談師宝井琴窓、手品師帰天斎正一のほか落語家二人が乗っていた。

朝日新聞社のチャーター船「ろせった丸」は、P&O社の豪州航路定期船「ロセッタ」の後身で、P&O社が英国ハーランド&ウルフ造船所（「タイタニック」「キャンペラ」などの建造所）に発注した最初の船として知られている。その後、姉妹船の「ロヒラ」とともに日本船となり東洋汽船が運航していたが、この満韓巡遊船就航当時は、横浜の尾城汽船の手に渡っていた。

わが国最初のクルーズ客船が、十九世紀にクルーズというユニークな運航方式をみだしたP&O社の有名船であつたという史実を知るとき、筆者は、何か因縁めいたものを感じると同時に、船舶史研究の面白さを覚えずにはいられない。

（山田 迪生）